

# 京都部落問題 研究資料センター通信

第9号

発行日 2007年10月25日 (年4回発行)

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

## 報告 部落史連続講座

### 京都の被差別部落と仕事

第3回

職業規制から見た京都の町

講師 小林文広さん

(京都市歴史資料館)

報告 湯浅 孝子

二〇〇七年度部落史連続講座の第三回目は、「職業規制から見た京都の町」と題して京都市歴史資料館の小林文広さんを講師に迎えて六月二一日に行われた。講演内容は次のとおりである。

先頃、明治五年の京都のある町内会の会則に、新平民には家を貸さない、という文言が発見された。本講演は、時代や住民の変遷によって、現在まで形を変えながら作り続けられてきた町内会の会則(「町式目」)にみられる住人の職業規制という切り口から京都をみようとするものである。

町箱と呼ばれる箱に保存され、残されてきた中世末期から明治三十年代にかけての京都町内の町式

目を集めた『京都町式目集成』

(『叢書京都の史料3』京都市歴史資料館編刊、一九九九年)のなかで、

最古のものである冷泉町 天正十六年(一五八八)の式目には「御奉公人ミちの物」へ家を売った場合は罰金を科すという記述がみられる。下本能寺前町 文禄三年(一五九四)では、座頭、猿楽などの芸能関係者とともに、武士奉公人を家の売買禁止項目に挙げていた。これは、豊臣方の浪人を警戒してのものではないかと考えられる。

年々、式目は変化し、町に住んでもよいとされる職業も変化していく。家を売ることが禁止される貸すまではよいと細かく規定されるようになり、複数残されている六角町の式目をみていくと、時代が下るにつれて職業の項目数が増えていくことがわかる。

菊屋町 寛永十九年(一六四二)のものにはキリシタンには一夜の宿も貸してはならない、と書かれ

ており珍しい。浪人、ばくち打ちや出合屋、人置(ともに売春に関するもの)等に家を貸すことは禁止とされた。非人が多かった「番屋上り」も項目にあげられている。また、髪結いには家を売ってはいけないが、貸すことはよいとされるなど、町内の人々の生活をうかがわせるものもある。

足袋屋町 慶安二年(一六四九)

元禄十年(一六九七)では、吉

利支丹、牢人、後家、検校、青屋(染物屋)傾城屋引こ見(傾城でなくなった人)せうむじ(声聞師)などとならんで被差別身分である「ゑた」が家の売買の禁止項目にあげられているが、江戸時代において明文化されている例は珍しい。中立売町 明暦二年(一六五六)以前では、糸屋、呉服屋以外の一切の家職は不可という特徴的な規則を持っていた。

各町の禁止項目にあげられている職業は、検校、座頭などの芸能関係に加え、青屋、紫屋、蘇芳屋などの染物屋、風呂屋、やくわん屋(金物)鍛冶屋、博労、とりうり(古道具、古着)盗品が扱われる場合があった)すわいとり(売春の仲介)、打ち箔屋、しめ油屋、等で、いずれも火の扱いや騒音、犯罪に関する恐れのある職業であるために避

けられたのではないかと考えられる。米屋は、多くの町式目の禁止項目にみられる。これは、人の出入りがあり、飢饉の際に打ちこわしの対象となるため避けられたともいわれるが、定説はない。寛文五年（一六六五）と慶安二年（一六四九）の足袋屋町の式目を比較すると「遊屋」などの売春を思わせる項目が増えており、京の町にこれらの商売が増えてきたことを思わせる。

一色町 延宝四年（一六七六）の式目では、役人衆、三間役（家を三軒持つ者）が禁止されている。役人衆は、朝廷とのつながりが強化されることで苗字帯刀が許され、町内の役をしなかったため、三間役は、役を三軒分引き受けなければならず、役目が早く廻ってくるためと、ともに住人の役負担が増えることが避けられた原因ではないかと考えられている。蛸薬師町 享保八年（一七三三）の式目に古来より三軒役以上は持たせない定めであるとあり、一軒の家が大きくなることは禁止されていた。被差別の仕事が禁止項目としてあげられているのは、六角町 寛文十三年（一六七三）の、せつたや（雪駄屋）わら草ぞうり、わらんず、柳八幡町 享保元年（一七一六）

の、なめし皮、ふすべや、等がみられる。

時代が下るにつれ、職業の種類が多くなり、人のいやがるもの、火の危険があるものはため、という記述に変化していく。身元をよく調べることで、町の主な商売である絹布以外の商売はだめとするなど、複雑なものや、特定の商売ではなく、当てはまるものを列挙する町が増えていく。山田町 明和七年（一七七〇）の式目では、項目を挙げた後、商売の規模が大きくなったため、物音や汚水が隣家へ影響をおよぼすために先の職業が禁止項目となった、と理由が記述されている。

作庵町 寛政二年（一七九〇）のように人の出入りが多いもの、正しからざる商売、などの一般的な表現もみられるようになる。

亀屋町 明治三年（一八七〇）のものは江戸時代と変わらず、禁止の職業を列挙しているが、この書き方は、明治四年の解放令以降にはみられない。妙蓮寺前町 明治二十三年（一八九〇）では、一つの町のなかで商売が重ならないように、との記述となり、町式目の中に露骨な職業規制はみられなくなる。

（京都部落問題研究資料センター運営委員）

当資料センターとしては、前身である京都部落史研究所の時に部落出身者への聞き取り調査を行い、文章化した歴史をもっている。しかし、今回掲載する「わが回想」のように、直接文章を書いていたものを採録しとことは少なかつたと記憶している。著者の藤岡さんは一九三〇（昭和五）年生れ、文中にもあるように、旧制工業高校の卒業生で地区の中では数少ないインテリである。崇仁地区の歴史についても一家言を持っておられ、当資料センターの部落史講座でも活発な発言をされている。今回はくやししい思いの就職差別について書いてくださった。文末に記されているように、それは「低学力」ゆえに差別されたと痛感されているが、他の箇所でもかかれてるように「内浜」に表わされる部落差別だった。この時期では、大学卒であろうと、地区・血縁の表徴が重なりと差別されており、これは現在でも同じではないかと思えるのである。ともあれ、高年齢に達せられたのに、遅い表出である。今後もしも健筆で過ごされることを期待したい。

京都部落問題研究資料センター所長 秋定 嘉和

## わが回想 差別とは

藤岡 晴美

一九四九年の冬一月。三学期が始まってから数日後であった。私は三年生は全員が講堂へ集められた。確か午前十時頃で寒い日であった。職業安定所から一人の職員が来た。私は三年生は職安から何故職員が来たのか、理由を知らされていなかった。それどころか職員が今日来るのも知らされていなかった。講堂に集まって職安から職員が来ているのを、その時知ったく

らいである。私らが全員講堂に集まった時点で職安の職員が姿を現わし、壇上へ登った。

『何で講堂に集められたんや』  
『自分ら三年生やさかい。就職の話に来やしたんや』

私語があっちこっち囁かれた。職員が壇上から口を開いた。

『君らはこの三月で学校を卒業する。今は終戦直後である。巷には失業者があふれている。君らの就職は大変に厳しいのが現状である。それに更に悪いことに、外地から引き揚げて来る兵隊さんの問題がある。兵隊さんには御両親もおられるだろうし、人によっては奥さ

んやお子様のおられる場合もあるだろう、となるとそんな兵隊さんを路頭に迷わすわけにはいかない。外地から引き揚げて来た兵隊さんにこそ就職の世話をするのが、我々職員の優先する役目である。

君らは高校生である。高校生であると言ふことは、君らの家庭が一般の家庭よりそれなりに裕福である筈である。それ故に後二・三年は親の脛を齧つても辛抱してもらつて、職安へは来ないで欲しい。来て君らには就職の紹介は出来ない』

講堂はしんとなった。

『何云つてるんね』

私は腹の底で呟いた。職安の職員の話は確かに正論である。私は伏見工業高校の木材工芸科にいた。級友には家具屋、製材所、清水焼の上物を入れる木箱を製造する所の息子がいた。彼らの家は裕福であった。しかし、工業学校は職業学校であるから、この学校が最終教育の場であつて、ここで仕事の基礎を学んで、就職を希望する者が多かった。普通科の学校とは違うのである。彼らの目的は大学への進学が目的であつて、高校は単なる通過点でしかないのだ。工業学校と普通高校では親の生活水準

に大変な格差があつた。

私の父は甲皮師こうかわであつた。靴の甲部を作る仕事に従事していた。いわゆる部落産業である。父が私を旧制の第二工業学校（現伏見工）へ進学させてくれたのは、そこへ行けば卒業後はそれなりの就職が出来て、部落産業から抜け出せると考えていたからである。私の近所で中学へ進んだのは私が最初であつた。私の住んでいた所は、当時露地が多く都会のゴミ溜めのよくな場所であつた。そんな所から私が中学へ進んだものだから、近所の人は私を奇異な目で眺めていたものである。父は私の卒業を楽しみにしていた。学校を出れば町の人（私らは部落の外の人をこう呼んでいた）と同じ職場で働けると夢みていた。足許が崩れる思ひがした。日本の当時の社会は失業者が満ち満ちていたとしても、仕方のないのかもしれないが、私には割り切れないものがあつた。

『畜生！』

人しれず私は吠えた。

私の出た伏見工業高校には、木材工芸科、機械科、建築科、土木科の四つの科があつて各々の科には当然乍ら卒業した先輩が、各々の業界で活躍していた。学校の先

生は職安が職業を紹介してくれないのならばと、業界で活躍している卒業生を頼つて在校生が就職できるようと、文字通り東奔西走して働き口を捜して下さつた。その甲斐あつて私の級の者は全員が就職の試験を受けられるようになった。

級友は二十四名いて、家業を継いだ者が五名で、十九名が就職試験を受けた。そのうち十五名の者が就職出来た。四名の者がアウトである。私もその一人だが、四名のうち、肉屋、靴屋、下駄屋が親の商売である。この頃の履歴書には親の職業を記入する箇所があつて正直に親の職業を書いた。会社、企業は先ず履歴書を審査する。ここでもう部落の者は篩ふるいにかけられ就職の門戸は閉じて仕舞うのだ。

私の履歴書に親の仕事が甲皮師と書いたので、私が就職試験を受けた会社は、甲皮師が何であるかを理解出来ず、私に一次試験を受けさせてくれた。通過出来た。二次試験は面接である。会社の総務部の人事課の人だろう。用意された部屋に入ると一人の男が椅子に座つていて私を迎え入れた。彼らとは何を話し合ったのか憶えていないが、和やかな雰囲気であつたのは

今でも憶えている。私としては充分に手応えを感じていた。それが次の面接者の問いで場は一転した。『それはそうと、市電はどこから乗つてこちらへ来るのですか？』当時、京都市内は市電が唯一の市民の足であつた。

『河原町七条。内浜です』

私が答えると、二人の面接者の表情が途端に凍りついた。二人の面接者は顔を見合わせた。目は口程に物を云ふ、で二人は無言ではあるが頷き合つた。

『今日の面接はこれで終わります』唐突にである。一人の面接者は椅子から立ち上がった。

『しばらく待つて下さい』

二人は次の間へ姿を消した。何故こうなつたのか私には痛いほど察せられた。二人は元の部屋に戻つてきて、私の前に立つて

『今日のご苦労さんでした。結果に就いて後日郵送でお知らせします。お引き取り下さい。』

言葉は丁寧だが、その態度は私を蔑んでいる様子が見え見えであつた。三日程して封書の郵便が来た。『当社は社員が現在足りていませんので、今回は貴男の採用は見送らせてもらひます』

予期した結果である。私への部落

差別以外の何ものでもない。他に、学校は二、三の会社を紹介してくれたが結果は皆同じであった。

こうして私の就職の機会は断られた。七条河原町Ⅱ内浜は京都の人にとって、イコール部落であったのだ。部落に生まれただけで、部落民だから就職させない、こんな不合理で不条理な理論があつて良いものだろうか！

私の近所に空地があつた。日曜日で休日もないのに、その空地へ部落の青年が集まつて来ていた。彼らは就職出来ない連中ばかりである。時間は有り余るほどある。仕方がないので、軟式野球には狭い空地なのでソフト・ボールをして閑を潰していた。来る日も来る日もソフト・ボールばかりしていた。雨が降らない限りは。お蔭でソフト・ボールの腕は上がる一方であつた。こんな連中の内で、ソフト・ボールのチームを作るようになった。ソフト・ボールの社会人大会の京都府予選にそのチームは参加して、島津製作所、専売公社等の並居る企業の強豪チームを撃破して京都大会を制して全国大会へ駒を進めることもあつた。私は失業者ではない。私は就職以前の問題で、意図的に社会か

ら締め出されていたのだ。職に就けない者を失業者とは呼べない筈である。意図的とは部落差別以外の何ものでもなく、これが当時の社会の普遍的な考えであつた。働ける能力と年令に達していながら働けない程情けないものはない。ソフト・ボールをしていた彼らは後日どうなつたかであるが、屠場に職を求めたり、八九三になつた者もいた。

私はいつ迄も職のないままブラブラもしていられないので父の甲皮を手伝うことになつた。父はこんな私に一言も文句を云わなかつたが、或る日一度だけ

『部落の間は、なんぼ教育をつけてもやっぱり部落の仕事しか出らんものやなあ』

と呟いた。私の胸にぐさつと突き刺さつた。貧しい中から、私を旧制中学にすすめてくれたのに、その期待に応えられなかつたから、私の責任ではなく社会の理不尽な扱いでこうなつても、私には重い言葉であつた。

余談になるが、私のいた木材工業科で、学校からの就職で会社勤めをした者で途中転職をした者以外は、全て課長か部長に昇進していた。中には高島屋に職を得た者

は、紳士録に名前を記載される程にまでなつていた。負け惜しみではなく、彼らの出世は友達として喜ばしいことで妬んだりしなかつたが、学校を卒業してこれから社会人として出発するその時に当たつて、私ら部落の者が同じスタートラインに立たせてもらえず、除外されたのが残念であつた。就職出来ない程惨めなものはない。

私は約二十年強、父と共に甲皮を製造していた。私らの造る甲皮は一品一点主義の手作りであつた。私が甲皮を造るようになってから十五年程で三菱系の千代田産業が靴業界に進出してきた。画一的なデザインと機械化された合理化による格安の靴が市場に回つて来た。靴製造関係者はたちまち市場を奪われ、靴屋が倒産して行つた。

私ら甲皮も圧迫され生活が苦しくなつた。幸いその頃は日本の経済が「いざなぎ景気」で各企業や会社は猫の手も借りたい程に活気を呈していた。私はその景気に便乗して向日町の井上電機という重電機の会社にもぐり込めた。その会社と同級生が課長として在籍していた。四十歳になつた私は一兵卒からの出発である。ここにも私は差別の何かを見た思いがした。

私の入社した会社は重電機で重さ三トンから五トンの製品をクレーンで吊り下げて、その下で働く者が多くいるのを後日知つた。別に会社は部落の者だからの理由でも危険を伴う職場に配置したのではなく、私ら部落の者は貧しいが故に低学歴しかなく、それが原因で結果としてそうなつただけである。クレーンは度々故障を起こして、一度なんかはワイヤーが切れて三トンの製品が落下したことがあつた。幸いその下に人が居なかつたので大事には至らなかつたが、もしもいつものようにその下で作業をしていたら大変なことになる。会社には約五百人強の会社員が働いていた。それなのに朝鮮の人は誰もいなかった。会社にこれは朝鮮人への就職差別ではないのかと私が問うた所、「偶然ですよ」であつた。果してそうなのだろうか？

私は六十年近く前の差別について私の実体験を書いたつもりだが、その差別が今も続いているのを知らねばならない。

## 本の紹介

吉村和真・田中聡・表智之共著（臨川書店、二〇〇七年）

## 『差別と向き合うマンガたち』

杉本弘幸

本書はマンガと社会的差別論の架橋をはかるうとする力作である。構成を示すと、第一章 マンガと表現（吉村和真） 第二章 マンガと歴史叙述（田中聡） 第三章 マンガと現代思想（表智之）の三章立てである。そして一章あたり、二本、計三十六本のコラムによって構成されている。本書は部落問題研究所の機関誌である『人権と部落問題』に連載されたものを基本としているが、かなりの加筆修正が施されている。そしてさらに各コラムに「もつと考えたいあなただのために」が追加され、考察を深めている。決して、安易に連載をまとめたものではない。筆者も連載を読んでいたものの、さらなる完成度の高さに驚かされた。

そのような凡百の作品ではない。まず取り上げられるマンガをいくつか記せば、『美少女戦士セーラーMoon』、『サイボーグ009』、『天才柳沢教授の生活』、『風雲児たち』、『風の谷のナウシカ』など、多種多様である。また楠勝平『ぼろぼろぼろ』、竹中労作『かわぐちかいじ画』、『黒旗水滸伝』、『平田弘史』、『血だるま剣法』など隠れた名作ともいえる、いくぶん「マニアック」な作品も縦横無尽に取り上げられている。

もちろん『カムイ伝』や、近年映画化もされた『夕凧の街桜の国』などの『差別と向き合うマンガたち』のタイトルにふさわしい作品にも、目配りをしているのはいうまでもない。

まず、本書の魅力は、その問いと分析の手作り感とオリジナリティである。著者三人は、差別論や人権論の専門家ではない。まず吉村和真は、近年アカデミズムに位置づけられつつある「マンガ学」研究のパイオニアの一人である。そ

して、田中聡は、日本古代史を本来の専門とするが、日本近代史学史にも、造詣の深い研究者。表智之も、近世思想史を専門とし、現代思想にも積極的に取り組んでいる。三人とも、歴史学／思想史研究の第一線の研究者なのである。

このような優れた研究者たちが、それぞれの立場から、差別とマンガという問題系に、執筆者会議の

たびごとに、「夜が更けても続いた議論」を行い、真摯に取り組んだ成果が本書なのである。だからこそ、ありふれた公式的な差別論や人権論にはない魅力にあふれているのだといえよう。三十六本のコラムはどこからでも読む事が可能であるが、私の興味関心に従っていくつか紹介してみよう。

まず吉村和真の執筆による「第一章 マンガと表現」をみてみよう。まず眼を引くのが、認知科学の成果などを取り入れた吉村のいうところの「マンガの文法」についてのコラムである。第一にどの「私たち」が、知らず知らずのうち、「マンガの文法」を受容しているかを明らかにしている。第二に「マンガの文法」の成立過程とそれによる様々な思想や価値観が、どのようにマンガの叙述に影響しているかを示している。別の角度からいえば、それはマンガを通した「私たち」の思想そのものを問う試みなのである。第三にマンガと差別の関係を考える上で重要である「マンガのリアリテイ」について考察している。各作品を基礎付ける時代や表現の背景にまで踏み込み、その「リアリテイ」を支える「私たち」の感覚の構造に迫っている。

次に田中聡の執筆部分、「第二章 マンガと歴史叙述」である。この章は、特に歴史叙述や時代の世相などを描いたマンガを分析の主題にしている。いわゆる「歴史マンガ」や、様々な歴史的な題材を扱ったマンガの歴史観に、マンガが執筆された当時の歴史学などの研究水準や時代状況がどのように関係しているか探るといふ問題設定を行っている。第一に歴史上の实在の人物を取り上げ、マンガによる当該期の文化や、身分秩序の表現、人物像の在り方の変化などを分析している。その上で歴史的な理解とどのように異なり、いかなる接点があるかを描き出している。第二に歴史的事実そのものを取り上げていない作品を分析している。ここで取り上げているマンガは、いずれもフィクションではあるが、いわゆる「歴史史料」では実証不可能な人々の記憶や感情を汲み取っている作品群を分析の俎上に挙げていく。また時代そ

のもの、生活のディテールを描くことで、歴史学の研究成果などより、「マンガ」の方が、はるかに時代そのものの本質をとらえることに成功している事例が多々あると述べている。ここでは、マンガだから可能な歴史叙述の可能性を提示しているのである。第三に社会の最底辺に位置する人々からみた「正史」に相對する「稗史」の世界や、様々な世界の差別観をえぐり出すことに成功している作品的分析を通じて、歴史における社会的差別のありかたをどうとらえることができるのか、という問いを発信している。

最後に表智之の執筆部分である「第三章 マンガと現代思想」では、「差別について考える上でマンガがどのように役に立つか」について考察している。表によると、マンガは作者の書きたいことと、読者の読みたいことのバランスを取りながら世の中に送り出されている。そのためマンガには、その時代の社会的課題や空気と密接に関わっている作品が少なくない。このような課題から、いわゆる「現代思想」のチームや分析手法を駆使しながら、マンガと社会の関係を明らかにする。第一にマンガと社会的課題の関係を読み解こうとしている。第二にマンガに現代社会の課題が描かれていると

するならば、マンガの叙述が読者にとつてどのような形で影響を及ぼすのか。それを明らかにするために、マンガのキャラクターの「生」と読者自身の「生」がどのように交錯しているのかについて考察している。第三にマンガが差別表現として糾弾された事例について考察を行っている。しかし、過去の差別表現事件を考察してみると、そこでの本質的な問題は解決してもいないし、議論され尽くしてもいないという。マンガと差別表現という議論の糸口を示し、問題提起を行っている。

以上、極めて簡単であるが、本書の内容を紹介してきた。本書の魅力はその議論の明快さである。「マンガ」そのものに興味のある読者も、「差別論」に興味のある読者も併せて満足できるべきである。併せて双方に興味関心があれば、さらにお薦めできる。特に第一章の人種表象に関する部分第二章の歴史叙述と社会的差別に関する問題群や、第三章の差別表現に言及した箇所などは、差別論に興味関心を持つ人々はずばり読まれるべきだろう。

一書にまとめられたことで、さらなる多くの読者が本書を手に取りられることを祈念してやまない。

(京都市市政史編纂助手)

本の紹介

鈴木道彦著 (集社 二〇〇七年)

越境の時

一九六〇年代と在日

渡辺 毅

いつだったか、「善きウエノム」という言葉がふと思い浮かんだ。「善きサマリア人」の語呂合わせみたく出てきた言葉で、ウエノム(倭奴)というのは、被抑圧者である朝鮮人が抑圧者である日本人を、唾棄し蔑んで表現する時に云われる云い方である。

植民統治下の朝鮮にも、朝鮮人に同情や理解を示し、時には日帝支配の横暴や不条理を彼らの側に寄り添って憤る「善き日本人」はいて、個々の人間関係の位相ではこうした日本人某に朝鮮人某が厚い信頼を寄せ、両者に友情が成立していた例も少なくなかったであろう。にもかかわらず、あの時代にあつてはどんな「善き日本人」も結局はウエノムでしかあり得なかったのではないかと、思つた時に浮かんだのが、「善きウエノム」。これを先日、梶山季之の小説「族譜」を読んでる時、私は思い出した。植民地時代の朝鮮を舞台に、創氏改名を頑なに拒み続ける朝鮮人に共感し、一定の信頼をさえ得ながら、結局は日本人である以上、

抑圧する側から一步も出られない青年官吏の苦悩を描いている。

「族譜」は、植民統治下の朝鮮で日本人はどこまでもウエノムでしかないことを日本人が自覚する物語であつたが、さて、鈴木道彦著『越境の時 一九六〇年代と在日』を読みながら、この「善きウエノム」をまたぞろ思い出したのは、サルトルの次の言葉が引用された箇処に至つた時である。

「良い植民者がおり、その他に性悪な植民者がいるというようなことは真実ではない。植民者がいる、それだけのことだ」

この言葉は、私の「善きウエノム」と響き合つ。善きウエノムと性悪なウエノムがいるのではない、ウエノムがいる、ただそれだけだ。ウエノムとは、植民地支配下の朝鮮にのみ存在した「過去」の遺物ではない。私はそう思つているが、サルトルの言葉を受けて鈴木某の意識が向かつたところも、「現在」の在日朝鮮人と日本人の関係であつた。ここでの「現在」とは差し当たり一九六〇年代のことである。サルトルの発言の背景には、フランスの植民統治からの独立を目指していた六〇年代のアルジェリアの闘いがあり、鈴木自身も仏文学研究者としてパリに留学中、在仏アルジェリア人の闘いやこれを支援するフランス人の闘いと間近に向き合つ体験をしている。だから鈴木はサルトルの言葉を、「過去」で

はなく「現在」に言及する言葉として受け止めた。過去の日朝両民族の関係を解釈する言葉としてでなく、同時代の、日本国内における植民者（或いは抑圧者）と被植民者（或いは被抑圧者）の関係、すなわち日本人と在日朝鮮人との関係を表す言葉として受け止めた。そしてその上で在日をめぐる二つの事件、小松川事件と金嬉老事件に次のような思いでコミットしていくのである。

「…民族と民族の関係においては、個人としては罪がなくとも、抑圧する民族の一員である限り人は集団的な責任を負っている。しかも在日朝鮮人の存在が日本によって作り出されたものである以上、当の日本人がこれを取り上げて発言するのは、きわめて不遜なことかもしれない。（中略）しかしその境界を越えられないものと認めてしまえば、理解の手がかりは得られない。（中略）たとえ抑圧関係によって隔てられていても、その境界を越えることができるのではないか。（中略）それは一つの想像力の問題ではないか。…」

一九五八年に起こった小松川事件は、在日の少年が女性二人を殺害した事件で、犯人の李珍宇自身が「動機は分からない」と証言し、「理由なき殺人」と喧伝された。事件と鈴木との関わりは李の処刑後に始まっている。李が在日女性・朴壽南と交わした往復書簡集『罪と死と愛と』を読み、鈴木は衝撃を受ける。

日本人・金子鎮宇として生きてきた少年に対し朴壽南は同胞愛をこめて、民族的アイデンティティや国家（この場合北朝鮮）への帰属意識を育むことの尊さを語り、自ら信じてきた朝鮮人としての正しい生き方を伝えようとす。朴のメッセージの背景には、李の犯罪は、在日朝鮮人の主体性を抑圧してきた日本社会に起因するという考え方が横たわっていた。李はこれに理解を示しながらも、決して自らの犯罪の責任を日本社会に転嫁せず、むしろ朝鮮人としての自我の確立と軌を一にするように、罪を犯した者としての自我をもはっきりと確立していく。鈴木は李の深い哲学的思考と、罪を自ら引き受けた「朝鮮人の犯罪者」としての姿を目の当たりにすることで、かえって李の強い主体性によって峻拒されたもの、つまり李の犯した事件の背景に横たわる朝鮮人の被抑圧性、さらにはそれを作り出している日本人の「民族責任」と、厳しく向き合わざるを得なくなる。

こうして鈴木は、一九六八年に起こった金嬉老事件に、その長い裁判闘争の最終局面まで深く関与することとなる。暴力団員を殺害し旅館に立て籠もった金嬉老が、警察の朝鮮人差別を告発したこの異常な事件の背景に、日本人の「民族責任」を感じたのである。実際、露骨で陰湿な差別によって悪に囚われ、悪と結び、悪に追われてきた金嬉老の半生

には、日本社会における在日の被抑圧性が凝縮していた。鈴木は、金嬉老の犯罪に日本人も「民族責任」を負っていることを証すべく、多くの同志と共に裁判闘争に心血を注ぐ。

だが金嬉老は、李珍宇ではなかった。自らの不幸や罪の一切は日本人によってもたらされたと考えた人間であった。或いは日本人の支援者らが存在によって、そう考える人間になつてしまった。鈴木はこのことへの悔恨をこめて、詩人の金時鐘が金嬉老に対し語りかけた言葉を、次のように引用している。

「『自分をこうあらしめたのは外部だけではなく、それを受動的に受けとめた自分自身にもあるんだ』というところまで意識がいつてほしい』と言い、それが『朝鮮に行きつく行為であると思っている』とまで述べている」

金嬉老事件裁判の貴重な、そして苦しい体験を経て、鈴木は再び李珍宇に立ち返る。

「李珍宇の書簡を感動的なものにしてるのは、この途方もない主体奪還の努力である。彼は言葉では加害社会としての日本を告発しなかつたが、彼の犯罪を準備したのが在日朝鮮人をこのように遇してきたこの日本社会であることは明瞭だった。だからこそ逆に私には、日本社会の醜さを明らかにする責任が日本人に委ねられているように思われた。」

こうした鈴木の考え方を、「自虐

的」と貶めたがる人は、現在、決して少なくないであろう。ここでいう現在とは、二一世紀の今、のことである。だが、或るAが別のBを、Bが罪を犯さねばならないほど抑圧しているのだとしたら、罪そのものを裁くことは別にAは自らの抑圧性を悔い改めるべきであり、そうしたければ複数の者が対等に主体的に生存する社会は成り立ち得ない。在日についてみれば、確かに状況は大きく変化した。鈴木は「従来と変わらないもの、以前よりさらにいつそう悪化したものも見受けられる。とりわけ戦後日本に一貫して流れている無反省史観は、その最たるものだろう」と警告する。私が思うに、鈴木の云つ「無反省」は、「変化した」とされる状況の中にさえ潜んでいる場合がある。「多文化共生」という言説を通して日本人が在日朝鮮人の存在を捉えよつとするのは、「変化」の肯定的な例ではある。だがそこには、過去の反省を伴わない表層的な肯定を押し通そうとする潜在意識が、時として見え隠れする。それではいつまで経っても、それこそ「善きウエノム」以上の日本人にはなり得ないのである。

無反省を貫く傲慢は、他者への「越境」を試み、是非を認め合いながら互いの主体性を成熟させていくありよつとは、あまりに対蹠的なものである。

（東九条マダン事務局長）

(池田香代子再話) 田中澄代  
 ライツ 100 (鳥取市人権情報センター刊, 2007.9)  
 今月のいちおし! 『熱と光を求めて 「部落の子らに教育を!」の願いを実現した出井富五郎と田中儀太郎のあしあと (改訂版)』(足羽隆著) 棕田昇一  
 リージョナル 7 (奈良県立同和問題関係史料センター刊, 2007.7)  
 大和国の散所に関する新出史料の周辺 吉田栄治郎  
 非人番への給米に関する一史料をめぐって 井岡康時  
 青年期の田部密と中尾靖軒 田部密探索 2 奥本武裕  
 「水国争闘事件」の再検討ノート 暴行・脅迫の意思の有無に関して 中村泰彦  
 情報と差別 岩橋瑞穂  
 雑感・理解しあうために 「ハイスクール・ミュージカル」を観て 久保衣重  
 リベラシオン 126 (福岡県人権研究所刊, 2007.6) : 1, 000円  
 特集 心豊かに楽しく市民啓発  
 聞き書き・戸切の運動とくらし 脇坂並木さんに聞く  
 1運動編 金山登郎  
 被差別部落の少女・お栄 1905年6月、堅粕村松園の踏

切事故 石瀧豊美  
 高橋貞樹著『特殊部落一千年史』の書誌周辺 対検閲闘争の経緯ともう一つの書誌松島版の謎 廣畑研二  
 急変貌を遂げるインド社会 未組織のダリット地区から見えたもの 西尾紀臣  
 ビデオ紹介 「大統領の理髪師」(イム・チャンサン監督, 2004年, 韓国) 盲従から自立へ 船津建  
 図書の紹介 加藤陽一  
 『<野宿者襲撃>論』(生田武志著) / 『近代化と世間~私が見たヨーロッパと日本』(阿部謹也著) / 『サンカの実 三角寛の虚構』(筒井功著) / 『竹島は日韓どちらのものか』(下條正男著) / 『沖縄戦・渡嘉敷島「集団自決」の真実』(曾野綾子著)  
 和歌山人権研究所紀要 2号 (和歌山人権研究所刊, 2007.3) : 500円  
 史料紹介 紀伊国伊都郡岸上村惣右衛門家文書 吉田栄治郎  
 「人権問題意識調査」結果から考える 上平 (けい) 士  
 和歌山の部落史研究文献目録 1 (1980年12月まで) 藤井寿一

## 2007年度部落史連続講座 京都の被差別部落と仕事 その2

- 第1回 11月9日(金) 「京野菜作りを支えた在日朝鮮人」  
 高野 昭雄さん(高校教員)
- 第2回 11月30日(金) 「ロシアに渡った靴職人たち」  
 前川 修さん(地域福祉センター希望の家職員)

時 間: 午後6時30分~8時30分  
 場 所: 京都府部落解放センター2階 実習室  
 参加費: 無料

## 部落史出張講座 地元で学ぶ地元の歴史

- 12月7日(金) 「野田村の歴史」 山路 興造さん(藝能史研究会代表)
- 時 間: 午後6時30分~8時30分  
 場 所: 改進黨コミュニティセンター2階 大会議室  
 (京都市伏見区深草加賀屋敷町24-26 TEL 075-611-3266)  
 参加費: 無料  
 協 力: NPO人権ネットワーク・ウェブ21

~ 参加希望の方は京都部落問題研究資料センターまで電話・FAX・電子メールでご連絡ください ~

グルカ兵 忘れさられた兵士たち 八木澤高明

対談 居場所をなくした人びと 犯罪を繰り返す知的障害者の現状と支援のあり方 山本讓司, 池田直樹

差別の歴史を考える 35 差別克服の課題 ひろたまさき  
部落解放研究 177 (部落解放・人権研究所刊, 2007.8) :  
1,000円

特集 「長吏文書」の研究から

「長吏文書」との出会いと関心 藪田貴 / 大坂非人研究  
の新たな展開のために 研究史整理と新史料『長吏文書』  
の紹介 松永友和 / 大坂四ヶ所組織と十三組 小野田一  
幸

戦後補償裁判としての「在日コリアン無年金訴訟」 在  
間秀和

資料紹介 松本治一郎記念会館旧蔵資料 松本治一郎関  
係書簡・資料から(その3) 本多和明

書評

「金川の教育改革」編集委員会編著『就学前からの学力  
保障 筑豊金川の教育コミュニティづくり』 木村和美  
/ 廣畑研二『水平の行者 栗須七郎』 黒川みどり

資料 部落史関係文献目録(2006年4月~2007年3月)

部落解放ひろしま 81号(部落解放同盟広島県連合会  
刊, 2007.7) : 1,000円

特集 仏教界の差別と広島の解放運動 共に学びを求め  
て

部落史研究報告 第11集(八幡浜部落史研究会刊, 200  
7.8)

神宮通り部落解放のあゆみ(語り手: 吉森熱子)

資料 「幕府法令・小松藩会所日記」意訳 水本正人

石神と宿神の考察 2 五藤孝人

部落問題研究 180(部落問題研究所刊, 2007.4) : 2,1  
87円

特集 分野別 研究の成果と課題

前近代身分制研究の動向 横山百合子 / 戦後社会運動史  
研究の方法について 広川禎秀 / 戦後日本の社会福祉と  
部落問題の解決過程との交点をめぐって 石倉康次 / 部  
落問題解決過程における文芸研究の歩み 川端俊英

生活困難層における子どもの人権と家庭の教育力 同和  
対策事業の展開と生活の形成力 川辺勉

調査報告 子どもの生活と意識の実態 梅田修・河瀬哲也・  
谷口幸男

書評 横山百合子著『明治維新と近世身分制の解体』 飯  
田直樹

部落問題文芸作品発掘 13

「哀話 漂泊の女絵師」木村毅 / 作品解題 秦重雄

史料紹介 滋賀県豊田・輯睦会文書 2 西尾泰広

部落問題研究 181(部落問題研究所刊, 2007.6) : 2,1

87円

第44回部落問題研究者全国集会報告

全体会 戦後史のなかの部落問題 戦後日本社会の構造  
変化との関わりで 鈴木良

歴史1分科会

私の身分的周縁論 高埜利彦 / 中世寺社の公人について

三枝暁子 / 近世の漁業構造と周縁社会 後藤雅知

歴史2分科会

社会的結合関係・部落・自然環境 都市史研究の立場か  
ら 布川弘 / 警察行政と社会運動 相関関係と分析視  
覚 大日方純夫 / 社会運動の「二重構造」と二重性 三輪

泰史 / 社会運動史研究の課題と方法 布川・大日方・三  
輪論文へのコメント 広川禎秀

現状分析・理論分科会

大阪・八尾における部落問題解決過程の検証と残された  
解同問題 国広悦正 / 地域人権運動の現状と課題 「人  
権救済」問題を中心に 新井直樹

教育分科会

教育実践における人権の課題 川本治雄 / 内心の自由・  
公共性の再生 生活指導論の歩みにふれて 吉田一郎

文芸分科会

『破戒』と『琵琶歌』・『田舎教師』 その相関性を見  
る 秦重雄 / 『破戒』成立の背景と今日的意義 出版  
百周年に当たって 川端俊英

P A C E 3 (PACE刊, 2007.7)

日本映画のなかで描かれてきた「在日朝鮮人問題」 ア  
ラカン

現代労働運動試論 2 社会的学生 / 労働運動のための覚  
書 山本崇記

水と村の歴史 信州農村開発史研究所紀要 22号(信  
州農村開発史研究所刊, 2007.3)

史料紹介

「松本一件」関係史料 住田正 / 平井村の新規溜池築造  
をめぐる争い 浅科古文書研究会

講演記録

ハンセン病の歴史と人権 林力 / 個人史から解放運動を  
顧みる 深井計美

みちしるべ 149(日本郵政公社近畿支社人権啓発室刊,  
2007.7)

同和問題に学ぶ 「響き合い、重なり合う」感性を

藤田敬一

ライツ 98(鳥取市人権情報センター刊, 2007.7)

今月のいちおし! 『しゃべれども しゃべれども』(佐  
藤多佳子著)

ライツ 99(鳥取市人権情報センター刊, 2007.8)

今月のいちおし! 『世界がもし100人の村だったら』

## 園敦史

ウォッチャーレポート 40 いつまで続くの!?職員の犯罪・不祥事 中村和雄

ねっとわーく京都 224 (ねっとわーく京都21刊, 2007.9) : 500円

ウォッチャーレポート 41 京都市の市有地の貸付をめぐる住民訴訟 鈴木亮

ねっとわーく京都 225 (ねっとわーく京都21刊, 2007.10) : 500円

市政レポート あれからはや一年 膿は出し尽くされたか京都市犯罪・不祥事問題 寺園敦史

はらっば 275 (子ども情報研究センター刊, 2007.7)

特集 被虐待の子どもたちと学ぶ権利

ヒューマンライツ 232 (部落解放・人権研究所刊, 2007.7) : 525円

走りながら考える 75 絵に描いた餅になっていないか人権条例は具体化されているか 北口末広

月刊『ヒューマンライツ』No.225,226,227掲載記事について謝罪文

「同和教育論」の教室から 7 もののみかた 地域学習用教材『富田のふうけい』を題材に 伊藤寛

書評 D・バッキンガム著 鈴木みどり監訳『メディア・リテラシー教育 学びと現代文化』 島山亮太

ヒューマンライツ 233 (部落解放・人権研究所刊, 2007.8) : 525円

走りながら考える 76 私たちの最も重要な宿題 今日の部落差別をどう捉えるか 北口末広

「同和教育論」の教室から 8 学校での「区別」を考える 西村百合子

ヒューマンライツ 234 (部落解放・人権研究所刊, 2007.9) : 525円

戸籍法改正の意義と今後の課題 二宮周平

青少年会館の新たな活用をめざして 青少年会館条例廃止前と廃止後の住吉地区の取り組み 部落解放同盟大阪府連合会住吉支部

「同和教育論」の教室から 9 また来たんかいな、にいちゃん 棚田洋平

ひょうご部落解放 125 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2007.6) : 700円

特集 兵庫の解放運動のこれから

再び兵庫の部落史に学ぶ 5 近世中、後期における部落差別の歴史 氏子と祭り差別問題を中心に 安達五男

講演 部落解放運動の誇りを論ず 小森龍邦

本の紹介

『世界屠畜紀行』(内澤旬子著) 鎌田昌平 / 『人やまちが元気になるファシリテーター入門講座』(ちょんせい

こ著) 足立宏子

[ひょうご部落解放・人権研究所] 研究紀要 13号 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2007.3) : 1,000円

特集 分析「人権政策マップ」 兵庫県内自治体の人権政策の現状

播磨国姫路高木村の高田家文書(金融編) 兼本雄三/倉橋昌之/高木伸夫/永瀬康博/藤原豊

部落解放 585号(解放出版社刊, 2007.7) : 1,050円

第33回部落解放文学賞

部落解放 586号(解放出版社刊, 2007.8) : 630円

特集 アイヌ文化振興法10年

本の紹介

『脱 暴力を呼びかける』(水野阿修羅著) / 『条例のある街 障害のある人もない人も暮らしやすい時代に』(野沢和弘著) / 『ぼくたちは生きているのだ』(小林茂著) / 『狼少年のパラドクス』(内田樹著) / 『下流志向』(内田樹著) / 『日教組60年』(日本教職員組合編)

ほんとうに「原則非公開」になったのか? 改正戸籍法を論じる 佐藤文明

外国人の義務教育化議論を深めよう 自立支援の在日外国人施策の実現にむけて 金光敏

法務省に人生を破壊された難民 外国人収容所の非人間的な実態を問う 山村淳平

“見えない”者たちが創った日本史 琵琶法師、イタコ、瞽女からの問いかけ 広瀬浩二郎

差別の歴史を考える 34 グローバリゼーションと差別 ひろたまさき

部落解放 587号(解放出版社刊, 2007.9) : 630円

特集 被差別部落はいま

ルポルタージュ 目的は差別をなくすこと 再生をめざす 部落解放同盟大阪府連合会飛鳥支部 社納葉子 / ルポルタージュ 解放運動の原点に帰って 京都市職員の不祥事と選考採用 矢野宏 / インタビュー 光は見える。地道にコツコツ続けるで 部落解放同盟奈良県連合会杏中支部の高齢者ふれあい交流 阪田はつみ / ルポルタージュ 福岡県糸島の被差別部落を訪ねて 鎌田慧

本の紹介

『在日朝鮮人問題の起源』(文京洙著) 川瀬俊治 / ハンセン病だった私は幸せ(金城幸子著) 三宅美千子

心の迷妄をどうやって舞台化するか 京楽座『破戒』劇評 七字英輔

「万歳」から見えるもの 村上紀夫

イラク現地報告 市民・子どもを襲う戦争の悲劇 西谷文和

- 季刊人権問題 9号(兵庫人権問題研究所刊, 2007.7): 735円  
 特集 世界に誇る憲法を発展させよう  
 振興会通信 85号(同和教育振興会刊, 2007.5)  
 「御同朋の教学」と「差別の現実から出発する」ということについて 5 岩本孝樹  
 同朋運動史の窓 1 左右田昌幸  
 信州農村開発史研究所報 98・99号(信州農村開発史研究所刊, 2007.3)  
 塩尻宿の飯盛女 瀧澤英夫  
 資料紹介 水平社運動の活動家からみた信濃同仁会 川向秀武  
 身同 解放運動推進本部紀要 27号(真宗大谷派宗務所刊, 2007.5): 1,000円  
 シンポジウム 民族差別と「同化政策」 アイヌ・沖縄・朝鮮 竹内渉・文公輝・仲間恵子・訓覇浩  
 ハンセン病問題に学ぶ  
 ハンセン病問題が私たちに問うもの 徳田靖之/「宗教的救済意識」に関する考察 2 訓覇浩  
 差別問題に照射される儀式と制度 戸次公正  
 「水平社宣言」の前で 見義悦子  
 差別と信心について 大谷一郎  
 韓国小島(ソロクト)更生園(現国立小島島病院)訪問記 大屋徳夫  
 図書紹介  
 高橋哲哉ほか共著『ちょっとヤバイんじゃない? ナショナルリズム』 蓑輪秀一/金子雅臣著『壊れる男たち セクハラはなぜ繰り返されるのか』 本多祐徹/上原善広著『被差別の食卓』 阪本仁  
 月刊スティグマ 134号(千葉県人権啓発センター刊, 2007.6): 500円  
 部落史を歩く 6 「勝扇子」事件の背景 1 坂井康人  
 月刊スティグマ 135号(千葉県人権啓発センター刊, 2007.7): 500円  
 部落史を歩く 7 「勝扇子事件」の背景 2 坂井康人  
 月刊スティグマ 136号(千葉県人権啓発センター刊, 2007.8): 500円  
 部落史を歩く 8 吉田神社 坂井康人  
 世界人権問題研究センター研究紀要 12号(世界人権問題研究センター刊, 2007.3)  
 欧州人権裁判所の機能強化の現段階 徳川信治  
 東山殿足利義政と被差別民 東山殿造営を中心に 家塚智子  
 近世近代移行期における畿内三昧聖の実態 木下光生  
 菱野貞次と京都市政 1929~1933年 上 白木正俊  
 帰国・外国人児童生徒の公立学校への受け入れに関する考察 大阪市の事例を通して 宋英子  
 朝鮮通信使の編成 員役と座目一覧 仲尾宏, 許芝銀  
 男女別学と平等保護条項 合衆国対バージニア判決を中心にして 有澤知子  
 権利と癒しの谷間 フィリピンにおける女性の人権と民衆のスピリチュアル文化 山下明子  
 「水に対する権利」をめぐる~社会権規約委員会一般的意見第15(水への権利)と水の確保に関する国際的な潮流 三輪敦子  
 月刊地域と人権 282(全国地域人権運動総連合刊, 2007.7): 350円  
 京都市職員の犯罪・不祥事根絶のための提言 市役所の腐敗体質の抜本的改善にむけて 情報公開と行政監視に取り組む京都・市民の会  
 月刊地域と人権 283(全国地域人権運動総連合刊, 2007.8): 350円  
 NHK関西「岐路に立つ同和行政」報道をめぐる部落問題解決と行政の課題 NHK関西「岐路に立つ同和行政」インタビュー再現 丹波正史  
 月刊地域と人権 284(全国地域人権運動総連合刊, 2007.9): 350円  
 支援加配の目的外使用は是正されたのか? 植山光朗  
 であい 544(全国同和教育研究協議会刊, 2007.7): 150円  
 人権のまちをゆく 37 隠れ念仏の里と萬次郎翁 山下太吉  
 であい 9 今、同和教育に向き合って 福田和博  
 人権文化を拓く 123 「分けない教育」の一日も早い実現を 徳田茂  
 であい 545(全国同和教育研究協議会編, 2007.8): 150円  
 人権文化を拓く 124 今こそ人権を考える 上原善広  
 どの子も伸びる 380(部落問題研究所刊, 2007.8): 735円  
 「人権教育」批判 「自尊感情と参加から対立解決へ」の問題点 2 谷口幸男  
 どの子も伸びる 381(部落問題研究所刊, 2007.9): 735円  
 「人権教育」批判 食肉をテーマにした人権総合学習について 谷口幸男  
 なら解放新聞 746号(奈良県部落解放同盟支部連合会刊, 2007.7): 140円  
 「部落への特化」を解き放て  
 ねっとわーく京都 223(ねっとわーく21京都刊, 2007.8): 500円  
 市政レポート 内部告発情報を京都市はどう扱ったか 寺

- [ 京都女子大学 ] 研究紀要 20号 ( 京都女子大学宗教・文化研究所刊, 2007.3 )
- 戦前期京都市における市域拡張と都市下層 高野昭雄  
きょうの論談 52 ( 論談社刊, 2007.7 ) : 500円
- 京都市職員不祥事について 今年の逮捕者、その内実を検証する 梶宏  
グローブ 50 ( 世界人権問題研究センター刊, 2007.7 )
- 祇園祭と神人 河内将芳  
国際人権ひろば 74 ( アジア・太平洋人権情報センター刊, 2007.7 )
- 特集 ジェンダーを考える セクシュアル・マイノリティの現状から  
国際人権ひろば 75 ( アジア・太平洋人権情報センター刊, 2007.9 )
- 特集 移住女性の人権を考えた韓国スタディツアーこべる 173 ( こべる刊行会刊, 2007.8 ) : 300円
- 部落のいまを考える 102 部落解放運動再生に向けて運動にかけた夢をあきらめない 佐々木寛治  
横浜・寿識字学校から 8 裸になること 大沢敏郎  
いのちを生きる 2 生きる力と生きづらさ 長谷川洋子  
こべる 174 ( こべる刊行会刊, 2007.9 ) : 300円
- 部落のいまを考える 103 問われているのは何なのか 次のステージへ 福岡ともみ  
横浜・寿識字学校から 9 問うこと・問われること 大沢敏郎  
いのちを生きる 3 六ヶ月目 長谷川洋子  
ごんずい 100 ( 水俣病センター相思社刊, 2007.7 ) : 840円
- 特別記念号特集 : 今思うこと  
相思社スタッフ座談会「支援とは何か」  
狭山差別裁判 395号 ( 部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2006.11 ) : 300円
- 写真で見る狭山事件44年  
狭山差別裁判 396号 ( 部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2006.12 ) : 300円
- 特集 狭山の真実をつたえる  
狭山差別裁判 397号 ( 部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2007.1 ) : 300円
- インタビュー 第3次再審をどう闘うか 中山武敏  
月刊滋賀の部落 407 ( 滋賀県同和問題研究所刊, 2007.7 ) : 400円
- 滋賀における部落解放運動の証言 水平社運動の戦士、元部落解放同盟滋賀県連副委員長 朝野温知 16 鈴木俊亮  
月刊滋賀の部落 408 ( 滋賀県同和問題研究所刊, 2007.8 ) : 400円
- 滋賀における部落解放運動の証言 水平社運動の戦士、元部落解放同盟滋賀県連副委員長 朝野温知 17 鈴木俊亮  
月刊滋賀の部落 409 ( 滋賀県同和問題研究所刊, 2007.9 ) : 400円
- 滋賀における部落解放運動の証言 水平社運動の戦士、元部落解放同盟滋賀県連副委員長 朝野温知 18 鈴木俊亮  
しこく部落史 9号 ( 四国部落史研究協議会刊, 2007.7 ) : 1,000円
- 故吉森勝巳さんを偲んで  
シンポジウム「部落史学習に、いま求められているもの」  
人権21 調査と研究 189 ( 岡山人権問題研究所刊, 2007.8 ) : 650円
- 特集 いじめ  
人権と部落問題 761 ( 部落問題研究所刊, 2007.7 ) : 630円
- 特集 「人権条例」の検証  
大阪における「同和地区」の呼称問題 成澤榮壽  
岸本裕史さんの仕事 東上高志  
戦後同和行政の展開と支配政策 9 「一般対策への移行 = 同和対策打切り」政策 ( 下 B1 ) 杉之原寿一  
差別と向き合うマンガたち 40 「読んでない」のに「知っている」とは 『はだしのゲン』の影響力 吉村和真  
文芸の散歩道 「癩」を患っていた武将 創作に見る大谷刑部の魅力 秦重雄  
人権と部落問題 762 ( 部落問題研究所刊, 2007.8 ) : 630円
- 特集 日本国憲法と国際平和  
さようなら、門脇禎二先生 鈴木良  
本棚 塚田孝著 『近世大坂の非人と身分的周縁』 鈴木良  
差別と向き合うマンガたち 41 ブルーズが生まれた時代 1930年代のアメリカ合衆国南部 田中聡  
文芸の散歩道 図書館における『破戒』のミステリー 成澤榮壽  
戦後同和行政の展開と支配政策 9 「一般対策への移行 = 同和対策打切り」政策 ( 下 B2 ) 杉之原寿一  
人権と部落問題 763 ( 部落問題研究所刊, 2007.9 ) : 630円
- 特集 児童生徒支援加配教員の実態  
差別と向き合うマンガたち 42 細分化するメディア・タブー 大塚英志/杉浦守 『オクタゴニアン』 表智之  
文芸の散歩道 近世文芸に著された女非人 『耳囊』より 小原亨  
戦後同和行政の展開と支配政策 10 政府・自民党の反動的「人権政策」上 杉之原寿一

- 解放の文学 15 執拗に訴える被爆体験 中沢啓治と『はだしのゲン』 音谷健郎
- 解放新聞 2327号(解放新聞社刊, 2007.7.16): 80円  
今週の1冊 『写真集 群集のまち』(太田順一著)
- 解放新聞 2328号(解放新聞社刊, 2007.7.23): 80円  
今週の1冊 『人間関係』(藤原和博著)
- 解放新聞 2329号(解放新聞社刊, 2007.7.30): 80円  
山口公博が読む今月の本  
『小津安二郎先生の思い出』(笠智衆著) / 『私の文学放浪』(吉行淳之介著) / 『差別原論』(好井裕明著)
- 解放新聞 2330号(解放新聞社刊, 2007.8.6): 120円  
ぶらくを読む 25 成熟社会の差別原論と部落差別 湧水野亮輔
- 解放新聞 2331号(解放新聞社刊, 2007.8.13): 80円  
解放の文学 16 核状況への多角的な視野 小田実と『HIROSHIMA』 音谷健郎  
今週の1冊 『お世継ぎ問題読本 どこへ行く? 女性天皇論争』(佐藤文明著)
- 解放新聞 2332号(解放新聞社刊, 2007.8.20): 80円  
「戸籍法改正」でなにが変わり、なにが変わらなかったのか 1 佐藤文明  
今週の1冊 『靖国の闇によろこ』(辻子実著)
- 解放新聞 2333号(解放新聞社刊, 2007.8.27): 80円  
「戸籍法改正」でなにが変わり、なにが変わらなかったのか 2 佐藤文明  
山口公博が読む今月の本  
『海の声』(日野範之著) / 『花降り』(道浦母都子著) / 『秘花』(瀬戸内寂聴著)
- 解放新聞 2334号(解放新聞社刊, 2007.9.3): 120円  
「戸籍法改正」でなにが変わり、なにが変わらなかったのか 3 佐藤文明  
ぶらくを読む 26 差異の解消でなく共生の公共空間の創造へ 湧水野亮輔
- 解放新聞 2335号(2007.9.10): 80円  
「戸籍法改正」でなにが変わり、なにが変わらなかったのか 終 佐藤文明
- 解放の文学 17 行動とともにある詩 高銀と『高銀詩選集』 音谷健郎  
今週の1冊 『自衛隊 変容のゆくえ』(前田哲男著)
- 解放新聞 2336号(2007.9.17): 80円  
今週の1冊 『オシムがまだ語っていないこと』(原島由美子著)
- 解放新聞 528号(岡山解放新聞社刊, 2007.6.25)  
講演 「ハンセン病」父と私のこと 6 林力
- 解放新聞 529号(岡山解放新聞社刊, 2007.7.10)  
講演 「ハンセン病」父と私のこと 7 林力
- 解放新聞改進黨 362号(部落解放同盟改進黨支部刊, 2007.7)  
改進黨地区の歴史 13
- 解放新聞改進黨 363号(部落解放同盟改進黨支部刊, 2007.8)  
改進黨地区の歴史 14
- 架橋 17号(鳥取市人権情報センター刊, 2007.9)  
特集 障害のある人もない人も、だれもが安心して、ともに暮らすことができる社会を目指して  
語る・かたる・トーク 149(横浜国際人権センター刊, 2007.7): 500円
- わたしと部落とハンセン病 22 林力  
信州の近世部落の人びと 26 旦那寺 9 斎藤洋一  
同和問題再考 79 文部省もお粗末 田村正男  
部落差別の現実 60 部落差別の実態 5 見ただけでは解らない差別 江嶋修作  
語る・かたる・トーク 150(横浜国際人権センター刊, 2007.8): 500円
- 同和問題再考 80 奮起した全同教 田村正男  
わたしと部落とハンセン病 23 林力  
信州の近世部落の人びと 27 旦那寺 10 斎藤洋一  
部落差別の現実 61 部落差別の実態 6 江嶋修作  
カトリック大阪教会管区部落問題活動センターたより 9(カトリック大阪教会管区部落問題活動センター刊, 2007.7)  
2つのドキュメンタリーから 橋本瑠璃子  
かわとはきもの 140(東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2007.6)
- 靴の歴史散歩 85 稲川實  
正倉院と皮革 5 宮廷革帯中の最高級品: 紺玉帯 アフガニスタン産青金石の装飾 出口公長  
皮革関連統計資料  
季節よめぐれ 232号(京都解放教育研究会刊, 2007.10)  
共に生きる社会を目指して 東九条マダに託す願い 朴実  
教化研究 139・140(真宗大谷派刊, 2007.6): 2,800円  
特集 資料・真宗と国家 5下 1940~1941<日中戦争期・後篇>  
京都市政史編さん通信 29号(京都市市政史編さん委員会刊, 2007.8)  
京都御所・御苑空間と近代日本の天皇制 下 伊藤之雄  
[京都女子大学]研究紀要 19号(京都女子大学宗教・文化研究所刊, 2006.3)  
戦前期京都市における下層社会の変化 高野昭雄

# 収集逐次刊行物目次 (2007年7月～9月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

あすばる 16 (甲賀・湖南人権センター刊, 2007.6)  
 人権に二重基準は無い 滋賀朝鮮初級学校への不当捜査から考える 河かおる  
 新しい歴史学のために 264 (京都民科歴史部会刊, 2007.4)  
 1920 - 30年代の都市社会事業運営と市政 京都市児童院をめぐる「格差」と都市社会 杉本弘幸  
 IMADR-JC通信 149 (反差別国際運動日本委員会刊, 2007.7) : 500円  
 特集 激化するスリランカ内戦 求められる国際的監視と避難民支援  
 解放教育 477 (解放教育研究所編, 2007.8) : 750円  
 特集 サマーラーニング 未来への夏だからこそ!  
 元気のもととはつながる仲間 29 「ひとりでない」ということが生み出す「力」を感じて 外川正明  
 時々の楔 福地幸造・部落解放教育の思想 4  
 元気の出る学校! 5 現場の底力 大庄北中学校 志水宏吉  
 解放教育 478 (解放教育研究所編, 2007.9) : 750円  
 特集 つながり高まる授業づくりの方法  
 元気のもととはつながる仲間 30 真に共感と信頼をもって迎えられるものとなるために 二つの人権教育指針 外川正明  
 時々の楔 福地幸造・部落解放教育の思想 5  
 元気の出る学校! 6 志のある学校 聖籠中学校 志水宏吉  
 解放教育 479 (解放教育研究所編, 2007.10) : 750円  
 特集 つづること書くことの実践を愉しむ  
 元気のもととはつながる仲間 31 「この子たちに」ではなく「この子たちと」 外川正明

時々の楔 福地幸造・部落解放教育の思想 6 「福地幸造・著作目録」といくつかの思い出 吉田豊  
 福地幸造・著作目録 (1947～1999) 福地幸造・著作目録作成委員会  
 解放研究 20号 (東日本部落解放研究所刊, 2007.3) : 2,100円  
 「賤民」に関する明和・安永初年の幕府法令の一考察 藤沢靖介  
 相州小田原の長吏小頭太郎左衛門について 鳥山洋  
 東日本における中世被差別民 「非人」「薦長」「庭掃」 坂井康人  
 紹介 浅草の部落を舞台にした小説「穢多町の娘」 石瀧豊美  
 史料紹介 『明治前期大審院民事判決録』から その4 入会権に関する近畿の二件 藤沢靖介  
 解放研究しが 17号 (反差別国際連帯解放研究所しが刊, 2007.5) : 1,000円  
 特集 「部落」の語りがたさ・伝えがたさ  
 「部落」の語りがたさ/聞きがたさ マイノリティ・インタビューの困難性 桜井厚  
 部落と知ること/教えること 三浦耕吉郎  
 若者たちの新たな動き 自由でこだわりのない「受容」 岸衛  
 青年サークルの目指すもの 部落内外の若者による子ども会活動とその特色 山本哲司  
 解放新聞 2325号 (解放新聞社刊, 2007.7.2) : 120円  
 ぶらくを読む 24 「構造改革先進国」英米の極大格差の実態 湧水野亮輔  
 解放新聞 2326号 (解放新聞社刊, 2007.7.9) : 80円  
 今週の1冊 『万世一系のまぼろし』 (中野正志編著)

## 事務局よりお知らせ

8頁のお知らせにありますように、部落史連続講座を11月・12月に開催します。今回は解放センターでの開催とともに、「地元で学ぶ地元の歴史」として改進黨地区のコミュニティセンターでも地元NPOの協力をいただいて開催いたします。是非、ご参加ください。

連載中の白石正明さん執筆の「京都府・市における教育の機会均等への施策について」は、お休みします。

所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階

TEL/FAX 075-415-1032

URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時 (祝日・年末年始は休みます)

交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅 (京都駅より約10分) 下車 北へ徒歩2分